大洲高校PTA月報

令和７年１２月号

会員寄稿

一朶の雲

保健・教育相談課　　田原　秀計

ＮＨＫがドラマ化した司馬遼太郎の歴史小説『坂の上の雲』が、昨年再放送されました。初回放送から16年経ち改めて見ると、冒頭のナレーションがより印象的に感じられました。今、わが国のみならず国際社会は多くの課題を抱えています。グローバルな視野で物事を考え知恵を絞ることができる人材が必要です。生まれた時代や場所は違っても、人がよりよく生きようとする「志」は変わりません。これからの時代を生きる子ども達には、日本人が大切にしてきた勤勉さや誠実さなどの美徳を礎として、自分たちの時代を創る気概を持って強く生き抜いて欲しいと思います。

まことに小さな国が、開化期を迎えようとしている。

小さなといえば、明治初年の日本ほど小さな国はなかったであろう。産業といえば農業しかなく、人材といえば三百年の間、読書階級であった旧士族しかなかった。明治維新によって、日本人ははじめて近代的な「国家」というものをもった。誰もが「国民」になった。不慣れながら国民になった日本人たちは日本史上の最初の体験者としてその新鮮さに昂揚した。この痛々しいばかりの昂揚がわからなければ、この段階の歴史はわからない。

社会のどういう階層のどういう家の子でも、ある一定の資格を取るために必要な記憶力と根気さえあれば、博士にも官吏にも軍人にも教師にもなりえた。この時代の明るさは、こういう楽天主義から来ている。

今から思えば実に滑稽なことに、米と絹の他に主要産業のないこの国家の連中がヨーロッパ先進国と同じ海軍を持とうとした。陸軍も同様である。財政が成り立つはずは無い。が、ともかくも近代国家を創り上げようというのは、もともと維新成立の大目的であったし、維新後の新国民達の「少年のような希望」であった。

この物語は、その小さな国がヨーロッパにおける最も古い大国の一つロシアと対決し、どのように振る舞ったかという物語である。主人公は、あるいはこの時代の小さな日本ということになるかもしれない。ともかくも、我々は三人の人物の跡を追わねばならない。

四国は伊予の松山に、三人の男がいた。この古い城下町に生まれた秋山真之は、日露戦争が起こるにあたって、勝利は不可能に近いといわれたバルチック艦隊を滅ぼすに至る作戦を立て、それを実施した。その兄の秋山好古は、日本の騎兵を育成し、史上最強の騎兵といわれるコサック師団を破るという奇蹟を遂げた。もうひとりは、俳句、短歌といった日本の古い短詩型に新風を入れてその中興の祖になった、俳人正岡子規である。

彼らは、明治という時代人の体質で、前をのみ見つめながら歩く。

登っていく坂の上の青い天に、もし一朶（いちだ）の白い雲が輝いているとすれば、それのみを見つめて、坂を登ってゆくであろう。